

氏 名	たか はし もり わか は 高 橋 (森) 若 葉
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 323 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	シュメール語の動詞複数語基の研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 吉 田 和 彦 教 授 庄 垣 内 正 弘 教 授 前 川 和 也

論 文 内 容 の 要 旨

シュメール語は現在のイラク南部を中心とする古代メソポタミア文明の言語で、楔形文字で記されるものである。シュメール語の系統関係は不明で、比較研究しうる同系の言語は知られていない。シュメール語は、セム系のアッカド語によるシュメール語との併記資料や辞書テキストの存在により、解読されたもので、その後の研究の進展もアッカド語資料によるところが大きい。

シュメール語資料は粘土板を中心に十万点以上が知られ、さらに未発掘の遺跡が数多く残されていることから、今後多くの資料の発見が期待される。資料は紀元前2600年頃からみられるが、シュメール人の王朝が途絶えた紀元前1950年の後は徐々に死語になり、その地域の主たる話し言葉はセム系のアッカド語になったと推定される。しかしながら、シュメール語はその後政治、学術語として使用され、もっとも新しい資料は紀元後1世紀のものが知られている。特に、文学作品については、そのほとんどすべてがシュメール人の王朝が滅亡した後に作成されたもので、それらの作品はアッカド語を母語とする書記によって記された可能性が高いものである。

現在のシュメール語研究の状況については、簡便な字典はいくつかあるが、辞書は刊行中のものしか存在しない。この辞書はペンシルヴァニア大学が出版しているものだが、1984年にBの巻(全1巻)が出て以来、この20年の間に、Aの第3巻(～amaまでを収録)までしか出版されていない。文法書についてはいくつかの出版があるが、いまのところ規範となる文法書は存在せず、文法的には未解明の点が多い。シュメール語は膠着語的な特徴をもつ言語で、名詞には格接辞が後続して格関係を表示し、また動詞語基の前後には接辞がつく。特に十余りのスロットをもつ複雑な接辞構造をもつ動詞組織については、未だ解明されていない点が多い。本論文は、多くの残された問題のうち、動詞形態論において重要な意味をもつと考えられる動詞の複数語基と、それに深いかかわりのある動詞の複数人称接尾辞を扱ったものである。

動詞の複数語基とは、従来、シュメール語文法で「複数動詞」と呼ばれるもので、動詞が複数性をあらわすための特別な動詞形式をもつ場合、その形式を指す。従来の研究においては、複数語基は自動詞主語と他動詞目的語の複数性を示す、すなわち、能格型言語といわれるシュメール語における絶対格名詞句の複数性を示すとされているものである。このような特別の形式をもつ動詞は、研究者によって数は異なるが、六から十ほど認められている。このうち、六つの複数語基についてはアッカド語の文法テキストによって「複数」とであると明示されている。

複数語基の先行研究の記述の多くはアッカド語の語彙テキスト、文法テキストの記述によるところが大きい。アッカド語資料はシュメール語研究にとって非常に重要なものであり、本研究でもアッカド語資料を利用している。しかしながら、アッカド語資料のほとんどがシュメール王朝滅亡後の紀元前二千年紀以降のものである。特に、複数語基の音価と意味についての最も重要な資料の一つである文法テキストは紀元前一千年紀、新バビロニア時代のものである。このように一千年以上も後世の記述をそのまま紀元前三千年紀のシュメール語資料に適用できるかは大きな問題である。また、従来の先行研究は、一時期の、もしくは特定の動詞について記述を行うもので、複数語基全体について通時的に扱った研究は存在しない。

本論文の目的は、シュメール語の複数語基の通時的、包括的記述にある。本稿ではアッカド語資料の記述をふまえた上で、紀元前三千年紀半ばの初期王朝期から、紀元前二千年紀の資料を、初期王朝期（シュメール都市国家分立期、紀元前2600-2340年頃）、アッカド期（サルゴン第一王朝時代、紀元前2340-2200年頃）、ウル第三王朝期（シュメール統一王朝時代、紀元前2200-1950年頃）、紀元前二千年紀（シュメール人の王朝が減び、死語になりつつあったと考えられる古バビロニア時代以後、紀元前1950年以降）の四つの時期に分け、それぞれの複数語基、複数人称接尾辞の事例を収集し、その表記によって整理を行う。資料の内容は王碑文、行政経済文書、法律文書、文学作品（神話、賛歌、叙事詩など）である。

本論文は11章から構成されている。第1章から第8章においては個々の複数語基、第9章では複数人称接尾辞、第10章では複数語基と複数人称接尾辞が共起する場合についてそれぞれの用例を検討し、考察を行う。第1章から第6章までは、バビロニア人によって「複数」とされる六つの動詞語基、第1章 *durun*「住む、座る」、第2章 *sug*「立つ」、第3章 *sub*「行く」、第4章 *ere*「行く」、第5章 *lah*「運ぶ」、第6章 *se*「存在する」を扱う。第7章と第8章では *sun*「入る」と *ug*「死ぬ」の二つの動詞語基をそれぞれとりあげる。この二つの動詞語基は「複数」と記述されるものではないが、時期によって複数性の表示機能が観察されるものである。

第1章から第8章では、それぞれの複数語基について表記を通時的に考察し、先行研究の問題点を指摘する。シュメール語の書記体系は、一つの文字が通常、多音価であり、また同音の文字が多数存在するという複雑なものである。シュメール語の楔形文字は表意文字としても音節文字としても用いられる。一般に名詞や動詞は表意文字で表記されることが多く、文法的な要素は基本的に音節文字で表記される。各章において、時期によって形式や表記が異なる多様な複数語基の形式を整理し、その時期ごとの形式を特定することができた。特に、第2章から第5章の四つの複数語基は同じ表意文字で表記される時期があり、表記には十分な注意が必要となる。このようにして収集、整理したデータに基づき、それぞれの複数語基を個々の時期ごとに、複数性を表示する名詞句の性質、複数の事物の名詞クラス、アスペクト、共起する接辞や共起する名詞句の格標示に注目して、それぞれの複数語基を体系的に特徴づけることを試みた。

その結果、個々の複数語基について、従来の先行研究とは異なるいくつかの指摘をすることができる。一例をあげると、アッカド語でともに「行く」と訳される二つの複数語基 *sub*「行く」と *ere*「行く」は、従来、文法テキストの記述に基づき、アスペクトによる対立とされてきた。しかしながら両者の複数性が関与する名詞クラスが互いに異なること、また共起する動詞接辞や名詞句が異なることが指摘できる。これらのことからこの二つの複数語基は単なるアスペクトの違いではなく、意味に近いが別の動詞である可能性が高いと考えられる。

第9章では複数人称接尾辞について扱った。シュメール語の複数人称接尾辞には、1人称複数（-enden）、2人称複数（-enzen）、3人称複数接尾辞（-eš と -ne）の四つの形式がある。このうち、3人称複数接尾辞 -ne 以外の人称接尾辞は複数語基と共起しうるものである。これらの人称接尾辞は複数の項が想定される場合に義務的にあらわれるものではない。また複数語基と共起し、同じ事物の複数性にかかわることも多い。これらの複数人称接尾辞についても時期ごとにその表記を確認し、これらの接辞がどのようなアスペクトであらわれるのか、どのような項の複数性をあらわすのかを調査した。その結果、複数人称接尾辞の分布がアスペクトによって異なり、そのアスペクトによって名詞句の格標示が通常と異なる場合があることが示される。また、複数語基の複数性が動詞の内項だけに関与するものであったのと異なり、人称接尾辞は動作主、使役者、被使役者、対象の複数性を示す場合があることがわかる。

第10章では複数人称接尾辞と複数語基が共起する事例を検討し、それぞれが別の複数の事物を指す場合があることを確認する。従来、ともに統語的な主語もしくは目的語の複数性を表示するとされるこれら二つの複数表現、すなわち複数語基と複数人称接尾辞の複数性は異なるものであることが示される。

最後の第11章では複数語基全体の特徴を記述した。表記について、時期を問わず一貫して複数性を示す第1章から第5章の五つの複数語基をみると、次のような特徴がみられる。初期王朝期からアッカド期は単数語基の表意文字を二つ横に並べて書かれるが、次のウル第三王朝期では音節文字表記が主流になり、そして紀元前二千年紀に入ると単数語基の表意文字を二つ縦に並べる新しい表意文字が用いられることがわかる。

シュメール語において、名詞句の複数性の表示は義務的ではない。複数語基が存在する場合にも、単数の動詞語基が用いられることがある。このことから、従来、複数語基も含めてシュメール語の複数性の表示は随意的なものであるとするのが

一般的であるが、本稿から紀元前三千年紀には、いくつかの例外はあるもののかなり厳密に動詞語基を使い分け、複数性を表示していたと考えられる。

名詞句の格標示をみると、複数語基が絶対格名詞句の複数性を示すという従来の解釈にあわない多くの例外があることがわかる。シュメール語の動詞語基は原則的に自動詞にも他動詞にも使われうる。例えば、動詞語基 *kur* は自動詞文で「入る」、他動詞文で「入らせる」という意味で用いられうるが、動詞に他動性を示す明確な形式的表示はない。また名詞句は頻繁に省略され、格接辞は脱落が多い。このような言語において、統語的に主語であるか目的語であるかという峻別は難しい。本論文では、シュメール語の動詞複数語基は、絶対格名詞句ではなく、その動詞にもっとも近い項である内項の複数性を表示するものであることを主張した。

最後に、複数語基全体としての通時的な表記の変化、また、それぞれの複数語基の時期的な分布を表のかたちで提示した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、古代メソポタミアにおいて楔形文字で粘土板に刻まれたシュメール語の動詞複数語基についての実証的な研究である。死滅した古代語の研究においては、話し手のいる現代語の研究とは異なり、言語学的な情報を引き出すことのできる唯一の源は現在に残された限られた量の文献資料である。しかもシュメール語の場合は、まったく孤立した系統不明な言語であるために、同系統の他の言語から比較言語学的情報を求めるということもできない。このような状況にある言語の組織を復元することはたいへんな困難をとまなう。しかしながら、いかなる言語学的問題にせよ、その全体像を明らかにするには、問題に関与する用例を文献資料から収集し、個々の事例に対して根気強く言語学的解釈を積み重ねていくよりほかに有効な方法はないのである。

うえのような事情で、シュメール語には言語学的な観点からみて解明されていない問題が山積されているが、本論文の分析対象である動詞複数語基もそのうちのひとつである。動詞複数語基とは、シュメール語文法で一般に複数動詞とよばれていたもので、単数語基と補充的に用いられる動詞形式である。ごく大雑把にいうならば、英語の“is”に対応する“are”のような形式である。この英語の“are”の場合は、指し示されるのが文法的主語の複数性であることが容易に理解できるが、シュメール語の動詞複数語基が何の複数性を表しているかについては従来から問題とされていた。シュタインケラー、吉川守、エッツアルトによる先行研究にみられる一般的な解釈では、動詞複数語基は自動詞主語と他動詞目的語、すなわち能格言語であるシュメール語における絶対格名詞の複数性を示すというものである。しかしながら、この解釈は受け入れられないと論者は主張する。その理由は、包括的な粘土板資料の調査によって多くの重要な例外が指摘できるからである。

紀元前一千年紀の新バビロニア時代にアッカド語で書かれたシュメール語の文法テキストには、動詞複数語基として *sub* 「行く」、*se* 「生きる」、*lah* 「運ぶ」などの六つの形式があげられている。さらに同じく動詞複数語基と考えられる *sun* 「入る」、*ug* 「死ぬ、殺す」の二つを加えた八つの形式を、論者は分析の対象とする。用例を収集する際に、粘土板資料の時期を初期王朝期（紀元前2,600-2,340年頃）、アッカド期（紀元前2,340-2,200年頃）、ウル第三王朝期（紀元前2,200-1,950年頃）、紀元前二千年紀（紀元前1,950年以降）に区分したうえで、記録されている動詞複数語基を含むすべての文を通時的に整理する。このように収集・整理されたデータに対して、共起する名詞のクラスや接辞の種類などを慎重に検討した結果、動詞複数語基が表すのは動詞との結び付きが弱い外項の複数性ではなく、動詞との関係が緊密な内項の複数性であると論者は考える。

一般言語学的な観点からすると、項構造において内項は意志性のない対象であるのに対して、外項は意志的に行為を行う動作主である。これをふまえるならば、シュメール語において、外項の複数性を表すために使われる人称接尾辞が指し示すのは、非人間クラスの名詞ではなく、意志性によって特徴づけられる人間クラスの名詞に限られるという別個の独立した事実からも、うえの論者の主張の妥当性が裏付けられる。そうすると、内項の複数性は動詞複数語基によって指し示されるのに対して、外項の複数性は人称接尾辞によって指し示されるという役割分担がシュメール語にあったことになる。このような二つの言語形式の機能的な分化が望ましいことはいうまでもない。

本論文は、未公開のものも含めて利用できるかぎりの粘土板資料に裏付けられた実証的研究の成果であり、高い評価を与えることができる。ただ本論中にあげられている用例の数があまりにも多く、個々の用例を検討しているうちに全体の論証

の筋道がたどりにくくなることがある。徹底した実証性の結果とはいえ、最後まで集中して読み終えるには読む側に相当の忍耐力が求められる。分析の鍵となる重要な用例だけを本論に示し、類例は補遺にまわすといった工夫があってもよかったように思われる。しかしながら、これは論文の構成にかかわる問題であり、本論文の内容自体の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお2005年3月3日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。